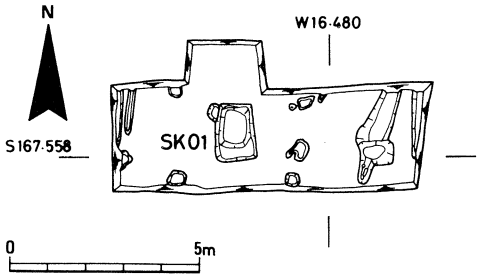
日向寺の調査

（昭和57年１月）

聖徳太子の建立とも伝えられる日向寺は，香久山の南麓と大官大寺との間にその位置が推定されている。この地域については，小規模な発掘調査を実施してきたが，遺構を明らかにするまでには至っていない。



遺構配置図（１：200）

今回の調査地は，現在の日向寺に南接し，塔跡推定地に西接する宅地である。地表面から遺構検出面までの深さは75㎝あり，その間の土層は４層に分けられる。いずれも宅地化に伴う盛土層で，遺構検出面も含めて，調査地一帯が後世に削平されている状況が明らかになった。遺構検出面は花崗岩の岩盤で，上面は一部霜爛化している。

検出した遺構は，８世紀後半と推定される土壙ＳＫ01と室町時代以降の溝や小ピットである。ＳＫ01は壁面が垂直に掘られ，底面は中央部より北で一段深くなる。平面形は東西 1.1 ｍ，南北 1.5 ｍの長方形を呈し，深さは 1.1 ｍある。土壙の堆積土は３層に分かれ，下２層が花崗岩霜爛土，上層が灰黄褐色粘質土である。土壙からは比較的多量の丸・平瓦と８世紀後半の土師器が出土した。

今回検出したＳＫ01は平面形が整っていることや，壁面が垂直近くに掘り込まれる点など，通有の土壙と異なり，特殊な性格をもつものと考えられる。瓦は７世紀後半～８世紀後半のものが含まれている。これらの瓦の胎土・製作技法は大官大寺所用瓦とは異なっているので，日向寺所用瓦と考えることも可能である。

今回の調査で明らかになった遺構や出土瓦から，日向寺解明の手がかりを得たともいえるが，伽藍配置や創建年代等，残された問題も多く，今後の調査が期待される。